

## 菓子職人をフランス語で言うと

ㄱㄴ 真理は隠れている。探し出すのはあなた自身だ。 小野しまと

☆ ☆ ☆

最近のブログで何度か取り上げている韓国ドラマ「私の名前はキム・サムスン」は、軽妙な筋運びといい、巧みな心理描写といい、知的な対話の組み合わせといい、大変出来の良いドラマに仕上がっている。

その第七話では、主人公のサムスンが医師のヘンリーに自己紹介をする場面がある。彼女は英語とフランス語をチャンポンにして、自分のことを色々と説明するのだが、マルセル・プルーストの「失われた時を求めて」の題名を原語で言ったりして、なかなか素養のあるところを示す。

彼女は、自分の職業が菓子職人であることを言うために、**Je suis pâtissier** (ジュ・スイ・パティシエ) という言葉を繰り返すのだが、実は、このフランス語は間違っているのだ。

これは、フランス語を知っている者なら誰でもすぐに気がつくことなのだが、パティシエの代わりにパティシエールという言葉を使わなければならない。女性が自分を菓子職人だと言うためには、**Je suis pâtissière** (ジュ・スイ・パティシエール) という言い方をする必要がある。

eの1字を付け忘れ、ルの音を響かせなかったということで、女は男になってしまう。パティシエールという言葉は、菓子職人になるためにパリで修業してきたというサムソンが、何よりもよく知っていなければならない言葉なのだ。

この一言で、ドラマ全体が何か嘘っぽい感じになってしまう。作りものだという空気が一瞬流れてしまうのだ。

もちろん、ドラマ自体は、これまでに放映された韓流ドラマの中でも抜群の出来映えなので、こんな空気はすぐに流れ去ってしまうし、フランス語の語感の無い人にはどうでも良いことなのだが、このドラマの出来が良いだけに、たった一つのミスがなんとも残念に思えるのである。

このことを言葉の清潔・不潔ということで問題にするのは、日本語の語感からいうとちょっと違和感があるかも知れないが、整理・整頓も清潔感の内を含めて考える欧米の感覚からいうと、一つの音が抜けるということは、言葉が清潔さ (propreté) を失うことに他ならない。

ましてや、この一音がドラマ全体の真偽を左右するほど重要なものであるだけに、パティシエという言葉が出てくるたびに、言葉の「不潔さ」が際立って感じられるのである。

言葉そのものが不潔だということではなくて、言葉の使われ方が不潔なのである。有るべき場所に、有るべき形で無いということが、欧米流の清潔感を左右する。私たちが下手くそな外国語を喋っていると、単に下手くそだというばかりではなく、「不潔」だとも感じられていることに注意すべきであろう。

「清潔マニア」という言葉で何を思い浮かべるか、フランスの友人三人に聞いてみたところ、三人が三人とも真っ先に例としてあげたのは、机の上の灰皿やタバコやライターの位置を気にする人ということだった。

このことについては、ブログ「名探偵モンクは清潔マニアだ」の中で詳しく述べたので、参考にしていきたい。

言葉がどのように配置されているか、適切に使われているかどうかといったことが、言葉の清潔・不潔を決定するのである。そして、一言の意味が、その使われ方が、時には全体の真偽までも決定してしまう。

「カミカゼ」という言葉が、日本の歴史に対する誤解を生みだしていることを、ブログ「カミカゼという不潔な言葉」の中で書いたが、このこととパティシエという言葉の誤用とは、本質的には異なる問題だと思うのである。

私たちは、もっと言葉の清潔・不潔ということに注意深くならねばならない。

[2007/12/13 magmag]